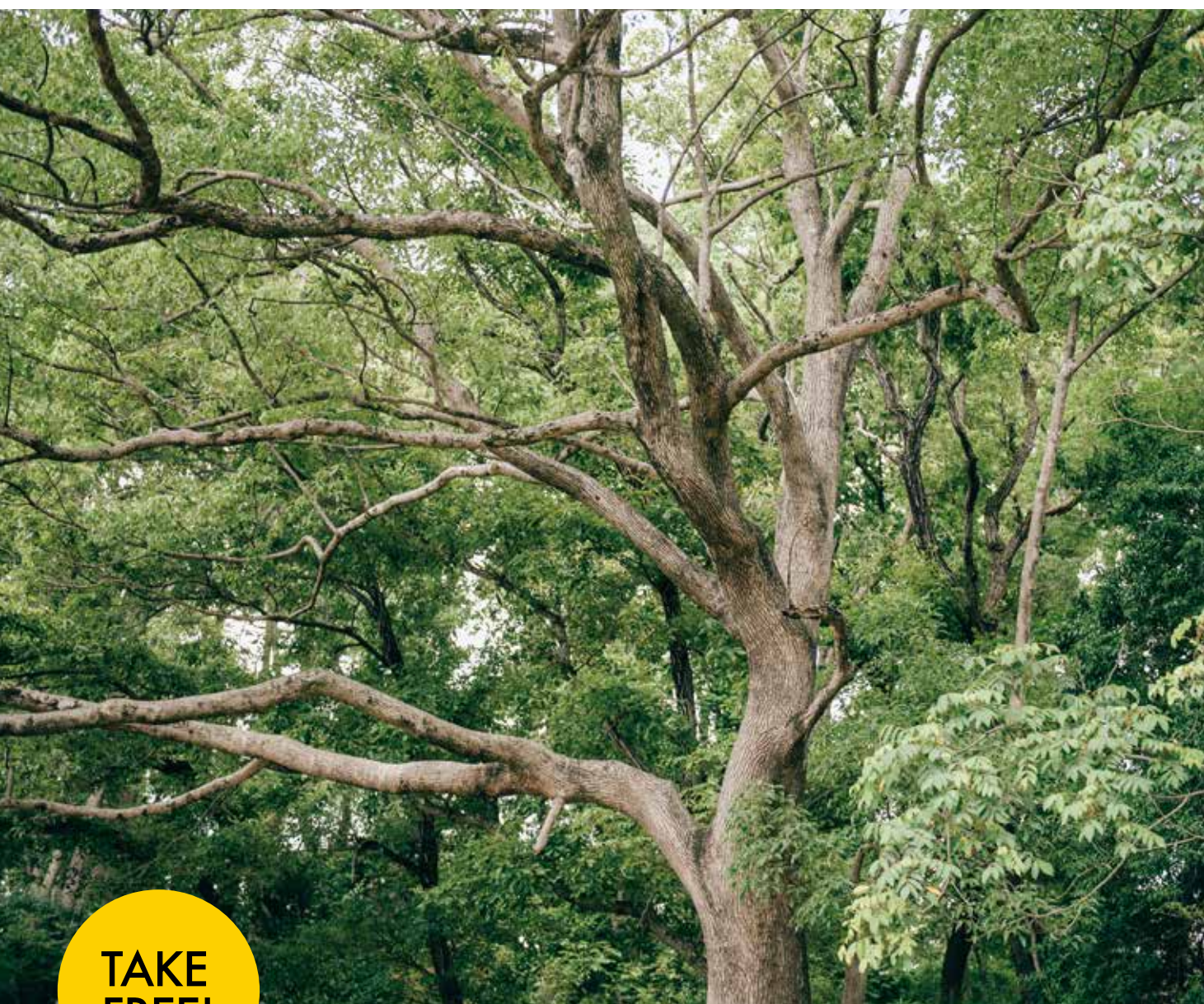


陽楽の森通信

Communication media for the people who surround YOURAKU-NO-MORI



TAKE
FREE!

02. 「結果的にそうなる」福祉サービス なないろサーカス団
04. 森のピザ屋の夏祭り 陽楽放送局 | 05. 大地の再生ワークショップ開催 みんなでつくる
06. 連続講座まとめ 陽楽の森から考える新常態<ニューノーマル>の輪郭 | 07. 陽楽の森から始まる都市の中の OECM
08. 場がつくる幸い 青春

都市計画の中で、背景へと押しやられた場所、陽楽の森。この場所をフィールドに、「多様性×多様性から生まれるサステナブル」のモデルをつくろうと活動する人たちがいます。

「結果的にそうなる」福祉サービス

中川直美 NPO法人なないろサーカス団 代表

Naomi Nakagawa

**なないろサーカス団の始まりは
既存のシステムへの違和感から**

2014年、谷茂則さんとご縁があり、2016年にこの陽楽の森の近くで障害福祉サービス事業所「なないろサーカス団」の旗を上げました。理想の福祉を表現できたら素敵だなという思いでスタートしてから、はや7年。今は約40人の仲間にも恵まれ、毎日を楽しみ過ぎてしています。

私は、大学の社会福祉学科を卒業後、大阪の障害者福祉施設で15年間勤務しました。福祉という仕事に可能性を感じる反面、業界特有の見せ方、伝え方に違和感を感じていました。福祉が魅力的な職場として社会に伝われば、たくさんのおもしろい人や事が集まるのではないかなと。まずは、楽しく発信したいと思い、その象徴に「なないろサーカス団」という名前をつけました。実際にとても魅力的

な方が集まっているので、そのように発信しています。

活動が広がり仲間ができる

福祉業界での違和感は、「障害者施設の顧客は障害者である」という大前提に始まることにあります。それは、目の前の障害がある方々に対して全身全霊でサービスを提供しなくてはならないという既存のシステムの中に、自分がおさまらなくてはいけないという違和感でもあったような気がします。そこから飛び出し、自分が思うところの「ほんとうの顧客」はどこにいるかを探したいと思いました。そして、抽象的に聞こえるかもしれませんが、障害がある方だけではなく、この陽楽の森で出会うセクターを超えた職業の方や地域の皆さんも顧客に含まれるのではないかと考えるようになりました。

た。であるなら、私たちはどのようなサービスを提供する福祉施設であるべきなのでしょう。

出会う人たちが顧客

既存の発想でいくと、障害がある人たちのスキルを伸ばすためにどんな訓練を提供してあげよう…という思考になります。しかし顧客をそこに限定せず、この陽楽の人たち、この地域の皆さんに広げていくと、「あの人はここで薪を割る仕事をしたいらしい。じゃあ、薪割りが好きならうちの施設の仲間を紹介しよう」。それが、団員たちの仕事につながりました。「動物が好きなデザイナーがいるらしい。そのデザイナーと一緒に動物のお世話をする仕組みをつくれれば、団員も少しデザインを教えてもらえる環境になるかな」というふうに、結果として障害が

ある人たちの生活も豊かになります。そこには、陽楽の森という場に集まる人たちと私たちとの方向性が似ているという背景があると思います。

陽楽という場と相性がいい

吉野林業が栄えた時代には、その土地の人々の何気ないまじわりがきつとあって、それらが結果的に林業を繁栄させたという歴史を、ある林業家から聞きました。もしかしたら、その仕組みと似ているかもしれません。

この陽楽の森からふわっと始まった福祉が、ふわっと林業と手をつなぎ、ふわっと姿をあらわす今のあり方が、私にとってはとても心地がいい。これから陽楽の森の中で、福祉を生業にしていきたいと思っています。

(プロフィール) なかがわ・なおみ

福祉系の大学を卒業後、大阪の福祉施設に15年勤務ののち、2016年にNPO法人なないろサーカス団を設立。陽楽の森を拠点に、さまざまな出会いを結びつけ、里山サイズの福祉サービスに邁進中。





団員と 陽楽な人々 との物語

ナナツモリへの就職 ～こうちゃんと田村オーナー～

「コーヒー屋さんになりたいの!」と夢を語っていたこうちゃん。そんな彼がカフェ「ナナツモリ」に就職し2年の歳月が流れた。田村オーナーは、こうちゃんが仲間入りしてくれたことにこそ意味があるとってくれた。障害者の就労をサポートしていると、しばしば言葉が先行する。訓練こそが自立への近道だと錯覚する。けれど、ナナツモリでの彼の様子を見聞きしていると、私たちが大切にすべき就労支援の核が見えてきた。働く哲学を再考し、そのリアルを教わった気がする。新たな仲間に見守られながら、こうちゃんは今も、きっとこれからも成長し続ける。



森の動物係

～ヤギのさくらとユキコとジュンさん～



「陽楽放送局」(『陽楽の森通信』第3号参照)の運営に携わっているウェブデザイナーのジュンさんには、週に3時間、ヤギの散歩と烏骨鶏の小屋掃除のアルバイトをお願いしている。「動物係のジュンさん」と団員とのコミュニケーションは実におもしろい。デザインというスキルは団員の新たな能力を開花させる予感。洋太くん、功くん、エド君ははまさかの長靴&軍手姿ユーチューバーになり、「さくらチャンネル」も誕生。12時に動物係を終えた後、ジュンさんが向かうのは、自称引きこもり女子(!?)のユキコの自宅。ユキコは最近、ジュンさんの家庭訪問を楽しみに、服を着替えて待つようになった。ユキコとジュンさん、さくらとユーチューバーズ。さてさて、どうなっていくのだろう。実に楽しみだ。

薪屋 森川商店

～森川くんとこうちゃんパパ～

こうちゃんパパとは、かれこれ10年以上のおつきあいになる。「なないろサーカス団」起業の際は自宅にもお邪魔し、共に構想を練り上げた。当時、退職後間もなかったこうちゃんパパは、第二の人生についても思いを語ってくれた。あれから7年。谷林業と共に進めていた薪割り作業が、少しずつ事業性を持ち始めた。なないろの力持ち・森川くんとこうちゃんパパが満を持してタッグを組み、「森川商店」が始動した。森川くんは陽楽での就職に希望と不安を抱きながらも「逃げない。頑張る」と決意表明。新しい人生が始まろうとしている。こうちゃんパパのあの頃の思い(大自然の中で生業を作る)もチームの中で実現。こんな嬉しい話はない。薪ストーブ屋「KUBERU」が陽楽でオープンしたことにより、仕事はさらに忙しくなりそうだ。団員の自立と仲間の起業。森川商店の形こそ、なないろサーカス団が目指す働き方である。



地域子ども食堂 森のピザ屋

～兼業福祉のヒロコさん～



管理栄養士の資格を持ち、ご自宅でコミュニティキッチン運営されているヒロコさんとは、法人設立の1年ほど前に出会った。ランチ作りをお願いできたことで、なないろでも温かい出来たて昼食が食べられるようになった。団員の就労支援と地域貢献の一環で始めた「森のピザ屋」。森川商店の薪を使った新たなコミュニティの中心にもやっぱりヒロコさんがいる。第3土曜限定のピザ屋はなかなかの盛況ぶり。森での就労支援と、ヒロコさんの表現活動「食と自然と地域づくり」が重なり合い、陽楽にまた一つあかりを灯した。

木工

～エドアルド君とシンさん～

日系ブラジル人3世のエド君。木工家のシンさんが彼のパートナーとなった。企業実習枠を使い、プロから機械の操作を教わる。丁寧に仕上げられる木製品。王寺町と連携した特産品「王寺町 wood」はエド君が担当することになった。はにかむ笑顔のプロフィール写真。木の粉で真っ白の顔。握りしめる工具の奥に映る旋盤。どんどん流暢になる日本語から、生活の充実がうかがえる。100年の歴史を持つ日本とブラジルの移民政策。地球の裏側に住んでいたエド君と私たち。陽楽はさまざまな軸を交差させ、包摂する。





最近の陽楽

森のピザ屋の夏祭り



八月十九日、陽楽の森では月一恒例となった地域子ども食堂「森のピザ屋」が開かれました。今回は陽楽の関係者や自治体と協力し、規模を拡大した夏祭りとして開催。メンバーの「盆踊りしたい」という言葉をきっかけに、陽楽の土場エリアは屋台が立ち並び、薪力ゴのやぐらがそびえ立つお祭り広場に様変わり。屋台では焼きそばやかき氷を始めとしたお祭りメニューがふるまわれ、目玉の盆踊りタイムでは子供も大人も汗だくで踊り続け、乾いた喉を瓶ラムネで潤すという最高のコンボを決めていました。

参加者は総勢二百名弱となり、過去一番の盛り上がりを見せた子ども食堂でした。地域に愛され、人々が集まり、薪を囲んで輪になって踊り、笑い声が森に響く。これから「陽楽がこんな場所になったらいいな」を先取りしたような、そんな楽しい夏の日でした。



森のこと

陽楽の森は最寄駅から徒歩十分ほど。入口も道路に面したまちの中にある里山林です。今、ここを舞台にさまざまな活動が起きています。新しい里山としてまちに開かれつつある陽楽の森を中心に、活動記録や里山の情報をお届けしています。

人のこと

陽楽の森には林業はもちろん、カフェ、写真、デザイン、福祉、建築など多岐にわたるジャンルの人たちが集まっています。とても魅力的な彼らを「陽楽な人々」と呼び、その活動や思いを取材を通じて紹介しています。

まちのこと

陽楽の森がある奈良県王寺町・上牧町周辺には美味しいお店や楽しいスポットなど素敵な場所がたくさんあります。まちの魅力を発見して紹介すること、ここに住む皆様がいかに楽しく住めるよう、森だけでなく、陽楽周辺のまちも耕します。



大地に、水や風の 通り道をつくる

「大地の再生」と、文字で書くとスケールの大きな言葉ですが、実際の作業は細やかでやさしいものでした。

2023年9月10日、森林整備などをメインに活動する任意団体「みんなてつくる（通称みんなつく）」は、北葛城郡王寺町・上牧町にまたがる陽楽の森で、「大地の再生」ワークショップを行いました。講師は「大地の再生」関西支部の西尾和隆さん。ほかにアシスタント講師に来ていただき、総勢15名で活動しました。



大地の再生 ワークショップ開催 by みんなてつくる

メイン作業は 「しがらみづくり」

「みんなつく」の活動拠点である陽楽の森には所有者が入れた作業道が多数ありますが、イベントや日々の利用で踏み固められ土はすべいぶん固くなっていました。固くな

った地面から樹木が水を吸い上げることは難しく、細かい根が張り広がる手助けをするために、菌糸を土の中に増やす必要があるそうです。講師の西尾さんから指摘され、今回は、素掘り側溝（道の脇に水が通るようにつくられた溝）と山の斜面の間に有機物（葉っぱなど）を溜めて菌糸ができる仕組み「しがらみ」を作るのがよいと提案されました。

柵のような土台に 葉や枝を詰め込んでいく

素掘り側溝の斜面に近い場所に枝で作った杭を50cmから1mおきに立て、杭と杭の間に枝を入れて柵のような土台をつくり、その土台と斜面の間を葉の多くついた枝で埋めていく。せつせと葉や枝を詰め込んでいくと、斜面と杭の間は有機物（葉や枝）でいっぱいになり、素掘り側溝に露出している土がなくなります。なるほど、これなら



土は雨水に晒されて流れることもないし、菌糸の発生も期待できます。これらが木根につながり水や空気の通り道を作るのだと思うと楽しくて、ワークショップは9時から16時までと長丁場でしたが、参加者は終始楽しそうでした。

初心者ばかりなのに夢中に

この日の参加者は「みんなつく」の会員でも山仕事はほぼ初心者の人ばかり。



して、本当に一生懸命作業していました。「みんなつく」はそれがおもしろいです。ふだんは全く別の世界で生きている人たちが、陽楽の森でいろんな作業することで、自分たちの身近にも森があると感じることができるようになりました。

森で、みんなで、つくろう

「みんなつく」は昨年立ち上がったばかりの小さな任意団体。森林整備や苗



かり。ふだんは全く別の仕事をしていて、「しがらみ」作りなど聞いたこともない人がほとんどだったはず。それなのにみなさんは講師の先生に教えてもらいつつ枝を運び杭を作つて、主体的に大地を助けるような動きを

づくり、薪づくりなど森や畑で「いろんなものをつくる」ことを軸に活動しています。これまでの活動では、竹林伐採と伐った竹を燃やす作業が中心でしたが、今回のような「大地の再生」作業も今後は取り入れていきたいと考えています。

毎月第2土曜日に陽楽の森で活動することが多いので、是非あなたも参加してみてください。きっと良い仲間と充実した時間に出会えますよ。

「陽楽の森から考える 新常態〈ニューノーマル〉の輪郭」

月に一度、全10回の
連続講座

2022年6月から2023年3月にかけて、毎月第3土曜の午後3時から、「陽楽の森」にて、連続講座（全10回）を開催しました。企画にあつての関心は、ニュータウン開発から取り残された約50haほどの都市の中の森から、「新常態〈ニューノーマル〉」とよばれるこれからの社会のありようをどのように思い描くことができるか、ということでした。トヨタ財団国内助成のテーマ（『新常態における新たな着想に基づく自治型社会の促進／地域社会を支える共創によるプラットフォームの創出や整備』）に応えようとしてのことです。

ニューノーマルの
広がりや奥行きとは？

「新常態〈ニューノーマル〉」においては、20世紀後半の高度経済成長期やバブル期に謳歌されたような経済的繁

栄とは違って、「植物の生長に依拠した社会発展」があつてこそ営まれる「暮らしの充実」が求められます。それでは、どのくらいの広がりや奥行きをもって、その輪郭を描くことができるでしょうか。

連続講座では、そのことを、林業政策、林学、生態学、さらに土中環境や菌、建築、福祉、そして哲学、政治思想という多様な領域にわたって、森のいわば「目に見える相貌」から「目に見えない相貌」までをとりあげて、浮き彫りにすることをめざしました。

実際の活動にいかして

この連続講座をつうじて重要なことは、座学にとどまらずに、そこで得た知見を実際の陽楽の森の活動にいかして行っていることです。

「大地の再生ワークショップ」や「自然共生サイト／OECM」がそれぞれ（通信第3号の他の記事もご覧になって下さい）。2024年春には、連続講座をとりまとめた『森のまじづくり（仮）』（実生社）も出版します。

----- 連続講座のテーマを振り返って -----



第1回
21世紀はどのような時代になければならないのか
文明的観点から考える

泉 英二 林業政策、森林・林業史／（一社）大和森林管理協会代表理事、愛媛大学名誉教授、国民森林会議政策提言委員長

第2回
林業と技術
イメージと実像

大住 克博 林学／元森林総合研究所主任研究員、鳥取大学名誉教授（一社）大和森林管理協会顧問



第3回
「里山の価値」の創造と地域の未来
林業から森林業へ

湯本 貴和 生態学／京都大学名誉教授、元京都大学産学連携研究所長、前日本生態学会会長

第4回
共創型の小規模技術による自然再生と地域づくり
展示づくりから自然共生エリアまで

三橋 弘宗 河川生態学／兵庫県立人と自然の博物館主任研究員



第5回
土中環境
「土」を支える生命循環

高田 宏臣 環境・土壌研究／（一社）環境土壌研究所・代表理事、（特非）地球守代表理事、（株）高田造園設計事務所代表取締役

第6回
菌の声を聴く
タルマーリーの動的なモノづくり

渡邊 格 オーナーシェフ／タルマーリ（野生の菌で醸すパン・地ビール&カフェ）



第7回
自然との関係を通して現代社会を捉え直す
未来社会のデザイン

内山 節 哲学者

第8回
森の風景
生きているものから建築をみる

伊藤 立平 建築家／伊藤立平建築事務所



第9回
療育と森
多様性がうみだす持続可能な世界

鈴木ゴリ宣仁 牧師・木こり／（株）とすこい（吉川ロジスティックグループ）代表取締役、SaveForestX 代表理事

第10回
撤退学と陽楽の森講座

堀田 新五郎 政治思想史／奈良県立大学地域創造学部教授、地域創造研究センター長



コーディネーター：家中 茂

環境社会学・村落社会学／（一社）大和森林管理協会顧問
鳥取大学地域学部特任教授



コメンテーター：谷 茂則

（株）谷林業代表取締役／
（一社）大和森林管理協会理事



陽楽の森、OECMに認定＝ 国際データベース登録へ

陽楽の森が、環境省によって「自然共生サイト／OECM」に認定され、また（2023年10月）。

自然共生サイトとは、国際的な協議にもとづき、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として保全する目標「30by30（サーティ・バイ・サティ）」を達成するために、国が認定を進めているものです（<https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/>）。また「OECM」とは、自然共生サイトのうち制度的な保護区を除いた区域であり、Other Effective Conservation Measures（以下「OECM」といいます）の保全を第一目的としないが一定の貢献を果たしている区域を指します。

OECMに認定されると、国際データベース「WDPA（国連環境計画＆国際自然保護連合世界自然保護委員会）」に登録されます。つまり、陽楽の森は、OECMとして、このデータベースに登録されることになります。それでは、「OECM」がなぜ注目されるのか、もう少し詳しくみていきましょう。

自然保護を目的としないが、 保全に貢献する区域

環境省が管轄する自然保護区として、国立公園や国定公園、国指定鳥獣保護区などがあります。それでは、環境省の管轄以外の自然はどのように保護さ

Other Effective Conservation Measures

2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系に……

陽楽の森から始まる 都市の中の「OECM」

家中 茂（鳥取大学地域学部特任教授・チーム「めだか」アドバイザー）

れているのでしょうか。たとえば、京都の神社仏閣の森などは、文科省が管轄する文化財保護の一環として保護されています（図参照）。ほかにも林野庁の管轄する保安林制度などがあります。しかしながら、このように環境省やその他の省庁の管轄下の保護区だけでは、とても「30by30」の目標は達成できません。そこで、自然保護を目的としているわけではなく、結果として生物多様性の保全に貢献している「OECM」がとても重要になってくるのです。

陽楽の森が「自然共生サイト／OECM」に認定されるにあたり、生物多様性の価値として次のことが評価されました。「里地里山といった二次自然環境に特徴的な生態系が存する場としての価値」「生態系サービス提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場としての価値」「越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場としての価値」。

陽楽の森で20年以上にわたって自然観察会を主宰してきた伊藤ふくおさんがいつもおっしゃるとおり、「ふつうの自然がふつうに存在している身近な自然」が故でしょう。認定のうえで、伊藤さんが蓄積してきた昆虫のリストが大きな裏づけとなりました（写真）。



図：都市の中の OECM と生態系ネットワーク（三橋弘宗さん資料）



また審査委員会の意見として「市街化が進む中で取り残された里山環境を対象に、障がい者支援を含むさまざまな分野で、関係者との連携によって、里山の新たな価値の創造とその価値の保全活用を担う広範なパートナーシップづくりが進められており、意義深い活動と思う」と付されていました。陽楽の森での活動をこのように評価していただいて、とてもうれしいです。

生物多様性から 生き方の多様性まで

この通信第3号でも、次のような多彩な活動を紹介しています。

連続講座を発展させた「みんなでつくる」の「大地の再生ワークショップ」、「なないろサーカス団」の地域子ども食堂「森のピザ屋の夏祭り」、「青春」の「場がつくる幸い」の取り組み。

通信第2号には、「どすこい」の鈴木ゴリ宣仁さんが「ひとりひとりに、それぞれのフツウ」という文章を寄せてくれています。そこから、陽楽の森は、「生物の多様性」とともに「生き方の多様性」を支えてくれるのだということを知りました。

これらのことが、トヨタ財団国内助成「新常態へニューノーマル」における「地域社会を支える共創によるプラットフォームの創出や整備」というテーマにつながっています。陽楽の森が、これからの都市の中の「OECM」のモデルになればいいな、と思っています。

場がつくる幸い

株式会社青春

「この国の人はどうしてこんなにゆつたりのんびりしているように見えるのでしょうか？」日本人の女性マサコが呟きます。するとフィンランド人の青年が「モリガ、アリマス」と答えます。次のシーンではマサコが森で木のこを採り、木々の間の空を見上げる映像だけが流れます。2006年公開の映画「かもめ食堂」の1シーンです。

森があるとなぜゆつたりできるのかの言及がなくとも、その美しい光景に「ああ、森があるからだな」と見ている私達は妙に納得してしまうのです。

ある「場」があることで価値観や人生が変わる。これは私達が2007年に「カフェナツモリ」を開業して以来、無意識にずっとテーマにしていたことかもしれません。「場」は「物や身を置く所」や「機会」などの意味を持ちますが、物理学での「場」は、物理量を持つものの存在がその近傍・



周囲に連続的に影響を与える空間のことを意味するそうです。私達は長年カフェと写真教室の運営を行ってきましたが、料理を届ける、写真技術を伝えるということ以上に、良

い影響を与える場を作りたい、という願いがあったように思います。そして自分達なりに見つけた「影響力のある場」を作る法則は「青春」や「ファンタジー」であり、「楽しい」や「ワクワク」から生み出される場に価値を見出しました。

2014年に「チャイムの鳴る森」を開催して以来、私達にとって「陽楽の森」は「場の種」となりました。冒頭のように森には人々に良い影響を与える力があります。そこに自分達の法則を当てはめた時、どんな化学反応が起きるのか。今私達の描いている森にはこんな光景が広がっています。

薪窯で焼くパン屋とコーヒー焙煎所。薪窯から煙が登り、パンやコーヒーのよい香りが森に立ち込め、訪れる人も、働く人も、そこにあらゆる隔たりは一切なく、皆嬉しそうに笑っている。その影響は森から街へ、森から山へも広がっていき、またそこに新たな場が作られる。

余談ですが「ナツモリ」の名前の由来は宮沢賢治の著書『春と修羅』に出てくる岩手県にある7つの連なった山の総称「七ツ森」です。この山を見ながら作品を書き「ほんとうの幸い」について考え続けた賢治。彼の追い求めた答えとは違うかもしれませんが、数年後「この地域の人たちはどうしてこんなに楽しそうに見えるのでしょうか？」と訊かれた時、「陽楽の森ガ、アリマス」と答えが返ってきたなら、それは私達にとっての「ほんとうの幸い」なのです。